

中国文化のキメラ —もうひとつの孔教論—

On the Chinese Culture as a Chimera
: Another Theory of the Confucian Teachings

鏡屋 一
(Abumiya Hajime)

Abstract :

April 28 in 1907, at the Yushima Shrine of Confucius, the Confucian ceremony what is called 'Sekiten', was performed splendidly at an interval of forty years. The first attention of this paper will be paid on this ceremony, in order to clarify the meanings of the transformation of Chinese Confucianism in modern Japan.

The dominant ideology of Tokugawa regime, which was based on the norm of the Samurai class, wore a 'Confucian' overcoat. So annual Confucian ceremonies had been held twice a year by Tokugawa regime at the Yushima Shrine. According to some archives, the last one was held in August 1867.

In 1907, the ceremony came to be performed again at Yushima by the newly established association named 'Koushi-saiten-kai', the Association of Celebrating Confucius. It had intended to the resurrection of traditional ceremony same as in the Tokugawa period, however the ceremony was no longer a Confucian ceremony, because it was not held by the Confucian scholars, but held by the Shinto priests in the Japanese Shintoism style.

Under the influence of modernization and Westernization after Meiji period, Chinese Culture was grafted on the particular Japanese tradition just like a 'Chimera' in an ancient Greek myth.

キーワード：中国文化、孔教、儒教、釈奠

Key Word : Chinese Culture, Confucianism, Confucian Teachings, Sekiten

はじめに

中華民国建国直後の上海において、押し寄せる政治的近代化の波の中で廃れ行く孔子崇拜の将来に危機感を覚えた名望家層が参集し、孔教会が組織された。孔子をキリスト教会のイエスの位置に擬える孔教会の活動の思想的基盤には、「中国固有文化」の精髓たる「儒教」を近代的な枠組の中で再解釈しようとする意図があった⁽¹⁾。

明治40年4月28日、東京の湯島聖堂において、ほぼ40年ぶりに孔子を祀る釈奠（せきてん）が大々的に挙行された。

近代日本における儒教の変容とその意義を考察しようとする本稿では、まずこの釈奠に着目する⁽²⁾。釈奠という儒教の儀礼の中に、まずはその変容の姿を見出すことが本稿の目的である。

釈奠は、『礼記』や『周礼』の規定では牛・

羊・野菜等を献じ「先聖先師」を祀る礼式とされていたが、やがて儒教を国教とする漢代より孔子個人を祀る儀式となっていた⁽³⁾。

武家の倫理に基づく徳川幕府の支配イデオロギーは「儒教」の外被を纏っていた。湯島の聖堂は、従来林家で祀っていた聖堂を元禄年間に將軍綱吉が湯島に移し学問所を開設したことから始まる。昌平坂学問所である。以来幕府管轄の下、聖堂すなわち昌平黌において林家が祭主となり毎年春秋の2回、積奠の儀式が執り行われていた。徳川時代最後の積奠は、記録の上では慶応3年8月に行われ、これにより「儒者を中心とせる幕府の積奠に終止符が打たれた⁽⁴⁾」。

明治40年の湯島聖堂における積奠は、かつての徳川時代のそれを「復活」させる意義を有していたが、しかしその実態は似て非なるものとなっていた。儒教の土台の上に、異なる思想的要素が「接木」されていると観察されるのである。

異文化の受容には必ず変容が伴うものである。明治初期の欧化論、『教育勅語』に象徴される儒教主義、そして天皇親政の「復古」を理論化する神道とが、中国起源の儒教に大きな「変容」をもたらしている。

「キメラ (chimera)」とは、ギリシア神話に登場する合成怪物「キマイラ (Chimaira)」に因む生物学用語である。「人間から生れたものではなく神の種族で、体の前の部分は獅子、後部は蛇、胴は山羊という怪物、口からは恐ろしい勢いで炎々たる火焰を吹き出す⁽⁵⁾」とホメロスが歌っている。

「接木」され「変容」を被った「儒教」の姿を、本稿では、比喩的に「中国文化のキメラ」と称することとする。

第1章 孔子祭典会の成立

明治40年の積奠を挙行了したのは、その前年に設立されたばかりの「孔子祭典会」である。本稿の議論の順序として、まずはこの団体の結成過程から見てゆくことにしたい。

「孔子祭典会」は、明治維新後の積奠廃絶を受け、その復興のために組織されたといえる。

「孔子祭典会」が主宰した湯島聖堂での積奠

に合わせて企画された講演会で演台に上がったある漢学者の次の発言は、同会設立当時の会員の危機感を如実に物語っている。

「明治維新以来新文明の輸入に汲々として所謂旧物破壊と云ふことが行はれた、そこで漢学の衰退と共に孔子の尊厳も大に無くなりました、欧化主義の絶頂に達した時に孔子教の如きは進歩の出来ぬものであると云ふので甚だ冷酷に扱はれ、今日祭典を行ひました所の旧聖堂、大成殿、あれも私が此時に覚えて居りますのは第一に古物博覧会と云ふものに彼處を占領された、其頃に今の教育博物館に占領されて仕舞つた、さうして孔子の尊厳は元の場所を追はれないと云ふ計りで、蜘蛛が巣を掛ける、鼠が糞をしても誰も払うものがなかった⁽⁶⁾」。

当時、徳川幕府が創建した昌平黌が存在した時代には、毎年春秋二期に積奠を挙行してきたが、明治維新を経て昌平黌が閉鎖されて以後、聖堂自体は保存されたとはいえ、祭典は長らく廃止されていた。孔子と四子すなわち顔子・曾子・子思・孟子の神像は残されているものの開扉されることは稀であった。聖堂は東京高等師範学校の保管下にあり、聖堂構内に附属東京教育博物館が置かれていた⁽⁷⁾。上記引用中に見る「古物博覧会」とは大成殿が「博物局観覧場」とされたことを指す。

「孔子祭典会」側の記録によれば、上述のような状況下、明治39年に東京高等師範学校の職員中、有志の者が、孔子の教化に感謝の意を表わすべく、聖堂の大成殿において、祭典を挙行しようと計画し、広く同志を募り、同年10月10日、最初の会合を行い、大体の方針を定めて更に発起人を勧誘することとした。次いで、11月28日に発起人会を開いて規約および祭典の方法を検討し、翌明治40年1月16日、再度発起人会を開催し、次の評議員および委員を選出した（【表1】、【表2】を参照⁽⁸⁾）。

10人の委員は更に委員長を互選し、嘉納治五郎が当選した。また委員より常務主任を選び、溝淵進馬が庶務、棚橋源太郎が会計を担当することとなった。その後委員会において、辻新次、股野琢、松浦詮（伯爵）の3名を評議員に推薦した⁽⁹⁾。

【表1】孔子祭典会評議員（20人）

井上圓了（文学博士）	井上哲次郎（文学博士）	伊沢修二	細川潤次郎（男爵）
星野恒（文学博士）	富田鐵之助	加藤弘之（文学博士・法学博士）	
嘉納治五郎	芳野世経	谷干城（子爵）	宗重望（伯爵）
那珂通世（文学博士）	南摩綱紀	牧野伸顕	阪谷芳郎（法学博士）
三島毅（文学博士）	重野安繹（文学博士）	渋沢栄一（男爵）	土方久元（伯爵）
関義臣			

【表2】孔子祭典会委員（10人）

嘉納治五郎（委員長）	市村讀次郎	細田謙蔵	吉田静致	棚橋源太郎
桑原隲蔵	安井小太郎	溝淵進馬	塩谷時敏	三宅米吉（文学博士）

明治40年4月、桑原隲蔵が清国留学を理由に委員を辞退したため、平田盛胤を補選し委員に選出した。4月28日、すなわち最初の祭典当日までに入会した会員総数は693人であった⁽¹⁰⁾。

井上圓了、井上哲次郎、加藤弘之、那珂通世、阪谷芳郎、重野安繹、渋沢栄一、伊沢修二、市村讀次郎、桑原隲蔵、嘉納治五郎等、評議員および委員の顔ぶれを見れば、錚錚たる人物の名が並んでいることに気づく。そもそも発端は東京高等師範学校にあったことを踏まえれば、同校関係者、および同校校長の嘉納治五郎の人脈であろうかと推測する。

第2章 明治40年の積奠とその実態

1 祭典の準備

本章では、「孔子祭典会」が執り行った積奠とはいかなるものであったかを明らかにしておきたい。この団体の企画する儀式次第は『孔子祭典会会報』に記録されており、そしてこの記録以外に積奠なる儀式が具体的詳細をもって記録されている他例を検出しがたいからである⁽¹¹⁾。

孔子祭典会の発起人会において、積奠実施の委員を選出し、細田謙蔵、三宅米吉、塩谷時敏の3名、そして平田盛胤がそれに協力し儀式方法の立案を委任することとなった。4名は数回の討議を重ねて詳細な祭典次第書を起草し、これを委員会に提出して、その賛成を得た。また、祭典は毎年4月第4日曜日に挙行政することも決

定した。明治40年4月第4日曜日は28日であり、たまたま丁未（ひのとひつじ）に当る。そもそも孔子を祭る「丁祭」は、陰暦二月と八月のはじめの丁（ひのと）の日に行うこととしており、祭典会の決定した積奠の時日は、丁日を用いた古例にかなうこととなった⁽¹²⁾。

祭典の式場である大成殿は、当時は東京教育博物館陳列場の一部となっており、ここを式場とするには陳列品を一時他に移さなければならなかった。そのために博物館員を煩わせることとなり、少なからざる費用を要した。また当日挙行政の講演会は大成殿附近に適切な会場がないことから、東京高等師範学校講堂において開催することになった⁽¹³⁾。

祭日に先立ち、殿内を掃除してから孔子神座前にある帳簾を掛け直し、殿の中央に香案（香炉を置くテーブル）を設け、香炉を置き、香盒（こうごう、香を入れる蓋付き容器）、香筋（こうちよ、箸）を副え、香炉の左右に燭台を置いて儀燭を立てる。また、殿の東壁に沿って礼器を陳列する。その順序は、最北に書閣（書棚）3脚、それぞれに古刻四書五経を置く。次に琴、箏具（ぜいぐ）、天球、硯及び硯屏（けんびょう）、欵器（いき）、特磬（とくけい、楽器）を並べる。磬の前方に伶人（雅楽を奏する楽人）の座位を設け、前後2列とする。伶人の座位より北少し前方に祓戸神座を設ける⁽¹⁴⁾。

さらに大成殿の西壁北寄りを祭官の位置と

し、その前方に尊案（テーブル）を置き、祭典当日、象尊（ぞうそん、象型の酒樽）、犧尊（ぎそん、牛型の酒樽）を安置する。その北に祝案（テーブル）を置き、祝版（祝文を書いた紙）を安置する。祭典当日はこれに祝文を貼る。さらに祭官の後方南寄りに饌案（テーブル）を置く⁽¹⁵⁾。

大成殿前と杏壇門内の前庭に天幕を張って会員席を設け、婦人席、新聞記者席、役員席等を区別し、また会員休憩所を杏壇門前、入徳門内、仰高門内の3箇所を設置する（【図1】聖廟祭場図を参照）⁽¹⁶⁾。

大成殿の西廊に仮の厨房を設け、祭官が簋（ほ、祖先神に供える穀物を盛る祭器、外側が四角で内側が丸い）・簋（き、祖先神に供える穀物を盛る祭器、外側が丸く、内側が四角）・籩（へん、竹製のたかつき、祭りに果実やほし肉を盛る器）・豆（とう、木製のたかつき）・俎（そ、祭のときに生贄を載せる木製平板の台）・爵（しゃく、さかずき）等の祭器を洗浄して、薦品（供え物）を用意して器に盛り仮の机に安置した⁽¹⁷⁾。その祭器および薦品は以下のとおりであるが、積奠で用いる薦品とは具体的に如何なるものか

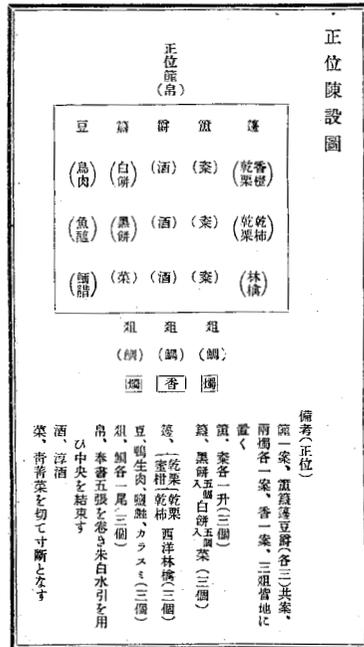
を示しており興味深い（【表3】孔子神座に供すべき薦品、【図2】正位陳設図、および【表4】配亨四座（顔子・曾子・子思・孟子）に供すべき薦品、【図3】四配陳設図を参照）。

また興味深いことに、上に挙げた礼器、祭器は、饌案、筐案以外は、いずれも徳川時代において積奠に使用したものであった。それらは明治期の積奠廃絶の後、博物局の所管となり、当時の東京帝室博物館に収蔵されていた。大抵は安永以後旧諸侯の献納によるもので、当時の技巧を尽くしたものである⁽¹⁸⁾。

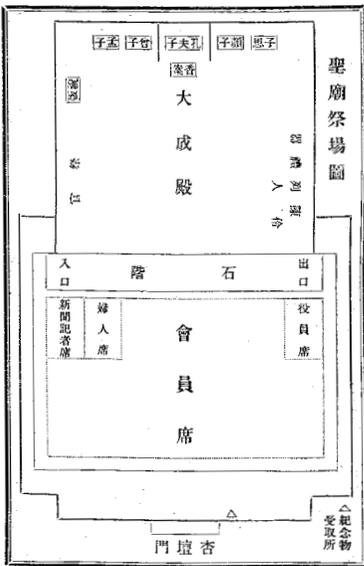
安永元年（1772年）の大火で類焼した湯島聖堂は元禄期に諸侯から奉納された祭器をことごとく消失したため、幕府は諸侯に祭器の献納を促し、それに応じた諸侯がかつて奉納した祭器と同様のものを進献していたようである（【表5】祭器奉納者一覧を参照）⁽¹⁹⁾。

各々の祭器・礼器は、国主や城主たち諸侯の献呈になるものであることは翻ってこのような儀式が、幕府中央のみならず地方各藩にまで拡大していたことを暗示している。

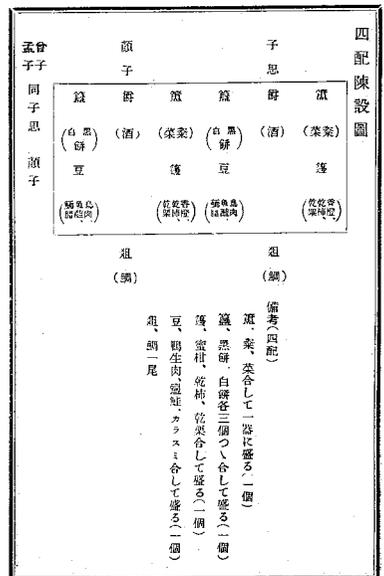
【図2】正位陳設図



【図1】聖廟祭場図



【図3】四配陳設図



【表3】孔子神座に供すべき薦品⁽²⁰⁾（【図2】正位陳設図を参照）

祭器	数	薦品
(1) 簠	3個	各々に黍（し）1升を盛る。全部で3升。洗米する。
(2) 簋	3個	各々に白餅5、黒餅5、菜を盛る。白餅は蒸糯米を搗いたもの。黒餅は白餅に胡麻子を研いで衣としたもの。菜は青菜を洗浄し一寸に切ったもの。
(3) 籩	3個	各々に蜜柑と乾栗、乾柿と乾栗、林檎を盛る。林檎は薄片に切る。
(4) 豆	3個	各々に鳥肉、魚醋、鯛脯（じふ、干した魚卵）を盛る。鳥肉は鴨を用い一羽を塩蔵して薄切りにする。魚醋は塩蔵鮭魚（しほさけ）を用い、薄片とする。鯛脯は塩蔵馬餃子（からすみ）を用いる予定であるが、当時都下の商店にこれを儲うものがなく、にわかに入手困難の際は、塩蔵海膽（うに）で代用する。
(5) 俎	3個	各々に鯛を盛る。各々1尾で、大きさは一尺五寸余り。
(6) 犧尊・象尊	各々1個	醇酒（濃くてうまい酒）を盛る。
(7) 爵	3個	
(8) 蒲勺（ひしゃく）	2個	尊（そん、酒樽）に添える。
(9) 幣篋（へいひ、布帛を載せる方形の竹かご）	1個	帛を盛る。帛は奉書紙5張を巻き、紅白水引を用いて中央を結束する。
(10) 饌案	1脚	簠・簋・籩・豆・爵、各々3個を置く。
(11) 篋案	1脚	幣篋を置く。

【表4】配亨四座（顔子・曾子・子思・孟子）に供すべき薦品⁽²¹⁾（【図3】四配陳設図を参照）

祭器	数	薦品
(1) 簠	4個	毎座1個 黍菜を合せ盛る。
(2) 簋	4個	毎座1個 黒餅3、白餅2を盛る。
(3) 籩	4個	毎座1個 蜜柑、乾柿、乾栗を盛る。
(4) 豆	4個	毎座1個 鳥肉、魚醋、鯛脯を合わせ盛る。
(5) 俎	4個	毎座1個 鯛1尾を盛る。
(6) 爵	4個	毎座1個
(7) 饌案	2脚	顔子、子思2座で共案。曾子、孟子2座で共案。各々座前に簠・簋・籩・豆・爵各々1個を置く。

【表5】祭器奉納者一覧⁽²²⁾

祭器	数	献納年月	献納者名
幣篋	1	安永3年12月	小田原城主大久保加賀守藤原朝臣忠顕
爵（正位）	3	安永4年6月	彦根城主井伊左近衛権中将藤原朝臣直幸
爵（四配）	4	同上	同上
簠（正位）	3	安永5年2月	伊達左近衛中将兼陸奥守藤原朝臣重村
簋（正位）	3	同上	同上
簠（四配）	4	安永4年正月	小倉城主小笠原左京大夫源朝臣忠総
簋（四配）	4	同上	同上
籩（正位）	3	天保15年2月	米沢侍従上杉弾正大弼藤原朝臣齊憲
豆（正位）	3	同上	同上
籩（四配）	4	安永5年2月	南部大膳大夫源朝臣利雄
豆（四配）	2	天保14年	大洲城主加藤次郎四郎藤原泰候
豆（四配）	2	天保14年11月	木下大和守豊臣朝臣俊敦
俎（正位）	3	安永4年2月	阿波淡路国主蜂須賀侍従兼阿波守源朝臣治昭

組（四配）	2	天保14年9月	御場所修造
組（四配）	1	弘化2年6月	濃州加納城主永井肥前守大江朝臣尚典
組（四配）	1	安永3年8月	越後国長岡城主牧野新次郎源忠精
香爐	1	安永3年8月	備前国主池田侍従兼内蔵頭源朝臣治政
香案	1	同上	同上
香盒	1	同上	同上
燭台	2	元禄2年8月	加能越三国主前田加賀宰相菅原朝臣綱紀
犧尊	1	安永4年2月	会津城主左近衛権中将松平肥後守源朝臣容頌
象尊	1	同上	同上
蒲勺	2	同上	同上
尊案	1	安永3年12月	土佐国主山内侍従兼土佐守藤原朝臣豊雍
福爵	1	安永3年9月	相良壺岐守藤原朝臣長泰
祝版	1	寛政元年12月	駿州沼津城主水野出羽守源朝臣忠友
祝案	1	同上	同上
琴	1	寛政元年8月	高崎城主大河内右京亮源朝臣輝和
磬（撥付）	1	安永3年12月	上総国久留里城主黒田大和守丹治直純
天球	1	天保14年9月	酒井若狭守源朝臣忠義
欵器	1	安永3年12月	松平左兵衛督源朝臣信明
筮器	1	安永4年9月	浜松城主井上河内守源朝臣忠義
硯	1	安永3年11月	豊浦領主毛利政次郎大江匡豊
硯屏	1	同上	同上
書閣	1	寛文4年秋	高極丹後侍従源朝臣高国
書閣	1	安永6年3月	高田城主榊原式部大輔源朝臣政一
書閣	1	安永3年12月	水野和泉守源朝臣忠任

2 積奠次第

積奠当日の4月28日は次のように始まった。

まず午前7時に、実行委員、祭官、伶人等が、東京高等師範学校附属中学校に参集する。先述したように孔子祭典会の濫觴は東京高等師範学校にあり、聖堂自体が同校の管理下にあったことによる。

7時30分、委員等は大成殿内外の設備を巡検し、開扉式を行った。香案の前に整列し、孔子及び四子（顔子・曾子・子思・孟子）の神櫃（神像を入れる箱）を開扉するや、委員長が焼香し、委員一同が礼拝する。このとき神剣を孔子神櫃内に置く。金銀装のこの剣は元禄4年に將軍徳川綱吉が製置したもので、江戸初期の著名な刀工、越前康継（やすつぐ）の作である。かつての積奠には必ずこれを神櫃内に置くことを例としたことになった。

午前8時、仰高門と入徳門を開く。参集者たちが漸次到着し休憩所や会員席に向かう。この

日の参加者は4百人余りであった。

8時40分、祭官と伶人が殿上の座位に就く。ここで委員長で当時東京高等師範学校校長の嘉納治五郎が前殿の石階に立ち、会衆に向い挨拶の辞を述べた。委員長が席に戻ると時刻は9時で直ちに奏楽とともに祭典が始まった。その儀式次第は次とおりである⁽²³⁾。

- 一、奏楽 乱声
- 二、祓主、祓戸神座の前に進み祓詞を奏す
- 三、大麻行事
- 四、祓戸神座を撤す
- 五、迎神式を行う
奏楽 平調音取越天楽
- 六、奠幣
- 七、奠饌
奏楽 三台塩
- 八、祭主祝文を奉読する
奏楽 五常楽

- 九、幣饌を撤す
 奏楽 還城楽
 十、送神式を行う
 奏楽 越天楽
 十一、奏楽 長慶子

以上が積奠の儀式次第である。

まず、一の「奏楽 乱声」であるが、これは「乱声（らんじょう）」という無拍子の雅楽で登場の音楽が奏でられる。

次いで、「二、祓主、祓戸神座の前に進み祓詞を奏す」は、穢れや罪障を除去する「祓（はらえ）」を行う「祓主」が「祓」を行う場所である「祓戸（はらえど）神座」の前で「祓詞（はらえことば）」を奏上する儀式である⁽²⁴⁾。

その後、「三、大麻行事」、すなわち「大麻（おおぬさ）」を用いてのお清めの儀式である修祓（しゅばつ）を行い、「四、祓戸神座を撤す」では「祓戸神座」を取り除き、そこで「五、迎神式を行う」となる。「越天楽」の奏楽の後、「六、奠幣（てんへい）」と「七、奠饌（てんせん）」、つまり、布帛などの貢ぎ物、飲食物を供える。

「奠幣」は、伝供（でんぐ）、すなわち神饌や幣帛などを手渡しして送り出す者が、先ず篋案（ひあん、方形の竹かごを置く机）を安置し、次に幣篋を献長（首位の神供の者）に渡し、献長がそれを供える。

「奠幣」の後に「奠饌」を行う。先ず伝供が饌案を安置し、簠、簋、籩、豆、俎を順次仮厨より伝送して献長に授け、献長がこれを献ずる。ただ爵は献長が自ら執尊の所より受け取り、神前に戻り献ずるのである。四配、すなわち四人の聖人の爵は他の供物とともにすべて伝供が供える。

続いて「三台塩」の奏楽の後、「八、祭主が祝文を奉読する」。

これで「奠饌」が終り、今回の「祭主」である男爵細川潤次郎が殿に上がり、参列者一同も起立する。祭主は香案の前に行き、焼香、礼拝し、伝供より授けられる祝版（祝文を書いた紙）を受け、「祝文」を奉読する⁽²⁵⁾。

「祝文」を読み終えた祭主が礼拝し席に戻ると、一同も着席する。その後「五常楽」の奏楽

を行い、「九、幣饌を撤す」。撤饌を終えて後、撤幣する。幣饌はすべて献長が行い、それらを伝供に授け、伝供がこれを仮厨に送り戻す。饌案、幣案は大成殿の西壁側の元の場所に置く。

続いて「還城楽」の奏楽。「十、送神式を行う」の後、再び「越天楽」及び「長慶子」の奏楽。祭官と伶人が退出する。

かくして午前11時に儀式は終わり、参会者を殿内に導き、陳列礼器等を観覧させた。

参会者退場の際には、杏壇門において「分胙」（ぶんそ、神に供えた肉で、祭の後で分配するもの。ひもろぎ）と記念品を提供した。今回の「分胙」は白黒の餅で、特別に用意しておき孔子像の前に供えたものであり、記念品は大成殿孔聖尊像の写真であった。

午後1時から3時まで参拝を許し、3時に仰高門を閉じ、3時30分より委員によって閉扉式が行われ、その後、祝文と幣帛を焚き、祭器、礼器を収蔵した。

孔子祭典会による積奠は、以後毎年4月に行われ、孔子祭典会が斯文会に合併吸収される大正7年の第12回積奠まで続いた⁽²⁶⁾。

今回の積奠の特徴は、積奠次第の「二、祓主、祓戸神座の前に進み祓詞を奏す」が明示しているように、祓主が祓戸にて罪穢れを祓うべく祓詞を奏上するなど、神道の儀式が取入れられている点である。

本来「儒式」でなされるべき積奠が「神式」で行われるという点に、合成獣「キメラ」の姿を瞥見できる。次章ではこの点に焦点を当て考察したい。

第3章 神官の登場

祭典の方法を如何にすべきかについて孔子祭典会の発起人会において、若干の議論があったようである。積奠の再興を主張するもの、質素簡易の方法を主張するものがあつたが、結局のところ神祭の儀式によって挙行することが決定した⁽²⁷⁾。

そして明治40年1月の発起人会で策定された「孔子祭典会会則」では、「第七条」に「祭典ノ儀式ハ神官ニ依頼シテ之ヲ行ハシム」と定められた⁽²⁸⁾。

事実、最初の積奠を執行に当る祭官を、賛礼1人、献長1人、祓主1人、伝供兼大麻行事1人、伝供兼幣籠役送1人、伝供8人、執尊2人、都合15人と定め、当日招聘した祭官は【表6】のとおりであった。

『会報』には、第1回から第4回まで招請した祭官が記録されている。そのうち第2回以降の主要な祭官を職次順に挙げれば【表7】のとおりである。

あえて神祭式を採用したのは何故であっただろうか。『孔子祭典会会報』の記録によれば、「抑徳川時代ニ於ケル積奠ハ殆我国神祭式ニ一致セルガ故ニ今回挙行ノ神祭式ハ之ヲ積奠ニ比シテ唯祭酒飲福ノ儀ヲ欠クノミナリ⁽³⁰⁾」という見解であったようである。

徳川時代において儒学と神道とが影響関係を持ち、習合したことはよく知られている。その典型は山崎闇斎の「儒家神道」であり、儒学と中世神道との結びつきの上に創唱された垂加神道がそれである⁽³¹⁾。

この神儒習合とは、中江藤樹、熊沢蕃山、山崎闇斎、伊藤仁斎らにしてみれば必ずしも「別々のものの習合」ではなく、日本古来の祭祀は歴史的に古代中国とつながっており、儒道も神道も同じく「普遍的な道の図式」の中で調和しようと考えていた、と見てよい。

「儒学は神道に学問や制度の要訣や図式をよるこんで提供したし、神道もそれによって成長した」のであり、「儒学が、中国・朝鮮のように自らの宗教性をそもそも確立しえず、すでに初

【表6】第1回積奠における祭官一覧⁽²⁹⁾

積奠職名	神社	祭官
賛礼	根津神社社司	宮西邦雄
献長	富岡八幡神社社司	富岡宣永
祓主	神田神社社掌	鶴田豊雄
伝供	下谷神社社司	阿部止之
伝供兼大麻行事	牛島神社社司	春田宣徳
伝供兼幣籠役送	亀ヶ岡八幡神社社司	梶 啓吉
伝供	三園神社社掌	永峰光暉
同	湯島神社社掌	石河忠周
同	亀戸神社社掌	今井 直
同	今宮神社社掌	菊池岩太郎
同	袖ヶ崎神社社掌	山口直麿
同	荏原神社社掌	本多正澄
同	神田神社社掌	木邨瑞枝
執尊	小日向神社社掌	中村六藏
同	隅田川神社社掌	矢掛鞆雄

【表7】第2～4回積奠における主要祭官一覧

回数	積奠職名	神社	祭官
第2回	賛礼兼祓主	神田神社社掌	鶴田豊雄
	献長兼初献	富岡八幡神社社司	富岡宣永
第3回	賛礼兼初献	富岡八幡神社社司	富岡宣永
	奠幣兼巫献	下谷神社社司	阿部止之
第4回	祓主兼終献	神田神社社掌	鶴田豊雄
	祓主兼献官	神田神社社掌	鶴田豊雄
	賛礼	神田神社社掌	木村瑞枝
	献官	下谷神社社司	阿部止之

めからある神道の領域を^あ・^いにしつつこれを外護し倫理や政治をこれに供給する役回りを務めたことは特記しなければならない。「それほどまでに神の潜在的な力は強かったのである⁽³²⁾」と考えたい。

また儒教が神道を内部に取り入れる必要性についてある研究者は次のように指摘する。

「儒学側からすると、神道の祭祀との結びつきは、それなりの理由があった。朝鮮半島における儒教も、先祖祭祀と深く関わるものとして今日まで続いている。これに対し、近世の儒学は祭祀の面を大きく欠いていた。その祭祀面が神道と結びついて展開することになったと理解できる⁽³³⁾」。

すでに述べたとおり、明治期における祭典会の積奠からみても、「神」を祀る際に、「畏(美)畏(美)(毛)白(須)」(かしこみかしこみもまをす)⁽³⁴⁾と祓詞を奏上するなど神道の儀礼を儒教側が採用しそれに依存していることは明白である。

伝統的な中国風礼式を廃止し「皇国神裔の御礼式⁽³⁵⁾」による即位礼により即位した明治天皇は、近代国家として出発した明治国家の「近代性」の象徴としてカイゼル風の髭を蓄え、軍服・サーベルを纏い、そして武士倫理を国家・家族倫理にまで拡大する天皇侍講の元田永孚らの手になる『教育勅語』が示す儒教主義の、その忠孝倫理の権威の人格的源泉でもあった。明治国家のイデオロギー的基盤こそが「キメラ」であったように見える。

日清日露の両戦争を経て高揚しつつある軍国主義と国粹主義の潮流の中で挙行された尊孔団体、孔子祭典会の積奠が奇妙な合成物として顕現したことは、そのような明治国家の「キメラ」振りを物語っているように思われる。

むすびにかえて

孔子祭典会の積奠終了後は講演会を挙行することが通例となっていた。

因みに第1回講演会は、午後1時より東京商業学校講堂において、700余人の聴衆を集め、嘉納治五郎が開会の辞を述べ、次いで加藤弘之、南摩綱紀、井上哲次郎が孔子に関わる講演

を行っている⁽³⁶⁾。

2回目以降の講演者達も、例えば、市村讚次郎、宇野哲人、金子堅太郎、阪谷芳郎、重野安繹、洪沢栄一、服部宇之吉、穂積陳重等、実に多彩な顔ぶれであるが、しかしそこには「孔子の精神は支那に亡びて我国に存する⁽³⁷⁾」と主張する講演者がおり、多彩の中から近代日本における「脱支那化」の色彩が濃厚になりつつあることが瞥見しうるのである。

例えば、1884年当時、公使として「甲申事変」の仕掛人となった竹添進一郎は、第5回講演会にて登壇したように発言した。

「今残つて支那にあるのは、只形式上表面上の学問であつて、孔子の学問の真髓は日本に伝わつて居る。諸君も御熟知の通り、日本の国体は忠孝が基になつて居る、随つて孔子の教が大和魂と直ちに融和して、千年来日本の国粹となつて居ります。

夫故に今日のやうに、孔子祭典も再興するのであります。支那に於ける孔子の教は、有名無実でありますから、年を経、世を易るに従ひ、風俗の腐敗益々甚しく、忠孝節義は、僅かに士君子の間に唱へらるる有様であります。どうぞ日本の孔子を学ぶ者は、山鹿素行の様に孔子の直門人たるの見識を持ちたうございます⁽³⁸⁾」。

ここに説く「大和魂」と融和した「孔子の教」という発想は、中国と日本の文化的障壁をいともたやすく通過して、異文化の受容と変容が作る陰影とは無関係に、「日本人」は直接孔子の弟子たりうるとする肥大した国粹主義の存在証明であり、近代中国のそれとは異なるもうひとつの孔教論の態様を見るのである。

【註】

- (1) 民国期における孔教会の活動とその思想的意義については、さしあたって、拙稿「孔教会と孔教の国教化—民国初期における政治統合と倫理問題—」(『史峯』第4号、1990年3月)を参照。
- (2) 明治期日本における儒教の展開については、宇野精一「明治以後の儒教—日本保守派—」(宇野精一他編『講座東洋思想 第10巻 東洋思想

- の日本的展開』（東京大学出版会、1967年）所収第4章、王家驊「明治維新後の日本儒学」（『東アジアのなかの日本歴史5 日中儒学の比較』（六興出版、1988年）所収第9章、劉岳兵主編『明治儒学と近代日本』（上海古籍出版社、2005年）を参照。
- (3) 黄進興（林雅清訳）「伝統中国における孔子廟祭祀とその宗教性」吾妻重二・二階堂善弘編『関西大学アジア文化交流研究叢刊 第3輯』（雄松堂出版、2008年）所収、須藤敏夫『近世日本積奠の研究』（思文閣出版、2001年）を参照。
- (4) 須藤敏夫『近世日本積奠の研究』、同上、183～184頁。
- (5) ホメロス、松平千秋訳『イリアス（上）』第六歌、171～211行（岩波文庫、1992年）191頁。
- (6) 松平康国「我が孔子観」（『孔子祭典会講演筆記（第八回）』『孔子祭典会会報』第8号、大正4年4月）27頁。
- (7) 「孔子祭典会報告」『孔子祭典会会報』第1号、明治40年10月30日、1～2頁。
- (8) 「孔子祭典会報告」同上、1～2頁。
- (9) 「孔子祭典会報告」同上、3頁。
- (10) 「孔子祭典会報告」同上、4頁。
- (11) 因みに徳川時代の積奠については、前掲、須藤敏夫『近世日本積奠の研究』（思文閣出版、2001年）、特に「第四章 幕府積奠の再興」を参照。『積奠私議』『昌平志』『積奠記』等に依拠しながら、当時の積奠の具体的な状況を発掘している。また、三浦叶『明治の漢学』（汲古書院、1998年）の「第四章 明治に於ける孔子の祭一 學禮會・孔子誕生會一」では「孔子祭典会」の結成に言及するが、積奠について述べることはない。
- (12) 「孔子祭典会報告」前掲、5頁。
- (13) 「孔子祭典会報告」同上、6頁。
- (14) 「孔子祭典会報告」同上、8頁。
- (15) 「孔子祭典会報告」同上、8頁。
- (16) 「孔子祭典会報告」同上、9頁。祭典前日午後大雨となり、雨漏りのため張幕が役に立たず、翌日も大雨と予想し、にわかに会員席を殿内に移すこととし、殿内の陳設を変更した。祭典当日は朝から天気は快晴となり、会員席を予定のとおり殿前に復し殿内の陳設をももとのとおりにしたという経緯があった。
- (17) 「孔子祭典会報告」同上、9頁。
- (18) 「孔子祭典会報告」同上、12頁。
- (19) 須藤敏夫『近世日本積奠の研究』前掲、58～60頁。
- (20) 「孔子祭典会報告」前掲、9～10頁。
- (21) 「孔子祭典会報告」同上、11～12頁。
- (22) 「孔子祭典会報告」同上、12～17頁。
- (23) 以下、儀式次第については、「孔子祭典会報告」『孔子祭典会会報』第1号、明治40年10月30日による。
- (24) 第1回目の積奠で奏上された「祓詞（はらえことば）」については、「孔子祭典会報告」『孔子祭典会会報』第1号、明治40年10月30日、18～19頁を参照。
- (25) このとき細川潤次郎が奉読した「祝文」は次のとおりである。
- 「維（これ）明治40年丁未4月28日丁未、潤次郎等、謹みて祭を至聖先師孔子神座の前に致す。窃に以（おもん）みるに、洙泗の水、長（とこし）へに流れて、瀾（なみ）を東海に増し、扶桑の樹、彌茂りて、輝きを西邦に揚ぐ。猗嗟（ああ）盛なるかな。夫子道は天地に侔（ひと）しく、徳は日月に並ぶ。過化存神（かかそんしん、聖人の徳が広く行き渡ること）、功德百王に踰（こ）え、生榮死哀、声誉万代に垂る。洵（まこと）に曠古の師表、億兆の儀範なり。潤次郎等、祀典の近ごろ闕けたるを慨（かなし）み、盛徳の謏（わす）れ難きを念（おも）い、茲に同志と與に聊蕪藻を薦め、以て景仰の誠を申べ、且感謝の意を致す。配するに顔子、曾子、子思、孟子を以てす。尚（こいねがは）くは饗（う）けよ。 従二位勲一等男爵 細川潤次郎」（『孔子祭典会報告』『孔子祭典会会報』第1号、明治40年10月30日、21頁）。
- (26) 大正3年4月の第8回のみは、昭憲皇太后崩御で自粛し、11月8日に延期された。尚、毎年の挙行年月日は以下のとおりである。
- | | | |
|------|----------------------------|----------|
| 第1回 | 明治40年4月28日 | |
| 第2回 | 明治41年4月26日 | |
| 第3回 | 明治42年4月25日 | |
| 第4回 | 明治43年4月24日 | 久邇宮殿下臨席 |
| 第5回 | 明治44年4月23日 | 竹田宮殿下臨席 |
| 第6回 | 明治45年4月28日 | 北白川宮殿下臨席 |
| 第7回 | 大正2年4月27日 | |
| 第8回 | 大正3年4月、昭憲皇太后崩御で自粛、11月8日に延期 | |
| 第9回 | 大正4年4月25日 | 久邇宮殿下臨席 |
| 第10回 | 大正5年4月23日 | 朝香宮殿下臨席 |
| 第11回 | 大正6年4月22日 | 伏見宮博恭王殿 |

下臨席

- 第12回 大正7年4月28日 北白川宮殿下臨席
- (27) 「孔子祭典会報告」前掲、4～5頁。
- (28) 「孔子祭典会会則」『孔子祭典会会報』（第1号、明治40年10月30日）巻末折込。
- (29) 「孔子祭典会報告」『孔子祭典会会報』（第1号、明治40年10月30日）6～7頁。また伶人（楽人）は9人として、宮内省式部職の伶人を招聘し、楽器は大鼓、鉦鼓、羯鼓、笛、笙、篳篥を用いることとした。「孔子祭典会報告」同上、8頁。
- (30) 「孔子祭典会報告」前掲、4～5頁。
- (31) さしあたって菅野覚明『神道の逆襲』（講談社現代新書、2001年）143～168頁。
- (32) 黒住真『近世日本社会と儒教』（ぺりかん社、2003年）122～123頁。
- (33) 井上順孝『神道入門—日本人にとって神とは何か』（平凡社新書、2006年）137頁。
- (34) 第1回目積奠で奏上された「祓詞」に見える。「孔子祭典会報告」『孔子祭典会会報』第1号、明治40年10月30日、19頁。
- (35) 阪本是丸『近代の神社神道』（弘文堂、2005年）40～42頁。
- (36) これらの講演記録の内容分析から日本「漢学」の「脱支那化」の過程を明かにする必要がある、その詳細は別稿に譲ることにする。
- (37) 深作安文「孔夫子の政治上の教訓」（「孔子祭典会講演筆記（第七回）」『孔子祭典会会報』第7号、大正3年4月）47頁。
- (38) 竹添進一郎「孔子の政綱」（「孔子祭典会講演筆記（第五回）」『孔子祭典会会報』第5号、明治45年4月）26頁。

